

# 今こそ読みたい ケインズ

根井雅弘

Nei Masahiro

## はしがき

数年前、私は、集英社インターナショナル新書から『今こそ読みたいガルブレイス』を出していただいた。ガルブレイスについては、以前にも書いたことがあったので、少し躊躇いがあったが、21世紀の視点からという要請を受けて改めて論じてみたつもりであった。

そして、今度は、ケインズを書いてほしいという依頼を受けた。ケインズについても何度か書いてきたので、ガルブレイス以上の戸惑いがあったが、これも通説にこだわることなく、現代的視点から自由に書いてほしいという依頼趣旨のようだった。ケインズの評伝スタイルで書いたものなら、拙著『ケインズを読み直す 入門 現代経済思想』（白水社、2017年）があるので、それを参考にしたほうがよいだろう。しかし、その本のなかではあまり触れなかった、「産業政策」としてケインズ政策を捉え直す解釈や、長期的雇用理論として『一般理論』を読み直す解釈などに焦点を当てて書くことは可能かもしれない

と思つて筆をとつたつもりである。

2020年春から新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより、大学教育は大きな試練に立たされた。長いあいだ、オンライン授業が続いたが、それを聴いていた学生の少なからぬ割合が、ストレス過多によりメンタル面での不調を訴えるようになったと聞く。オンライン授業を担当する教員にしても、パソコン画面を見てマイクで語る講義が長期化すると肉体的にも精神的にも疲労したものだつた。

今年度に入つて、ワクチンや治療法などが次第に普及し、大学の授業もいまのところ通常の形態に戻っているのは喜ばしい限りだ。もともと、ウィルスの変異の可能性などによつて将来どうなるかは不確実だが、考えてみると、私がとくに力を入れてきたケインズ（1883～1946年）やシュンペーター（1883～1950年）などの経済学者は第一次世界大戦中のスペイン風邪の大流行を生き延びて活躍していたのだった（マックス・ウェーバーは、惜しくも、スペイン風邪をこじらせた肺炎で亡くなっている）。ケインズやシュンペーターがスペイン風邪に言及した文章があまりないだけに、改めてこの事実に気づいたのは、私にとっては新しい「発見」だった。

時代が大きく変わろうとしているとき、ケインズの読み方も修正されていく可能性はあ

ろう。以前から、「不況になれば財政出動を主張するのがケインジアン」の証」のような雰囲気になんか抱いてきたが、本書を読んだ読者がそのような紋切型のケインズ理解から解放されることを願っている。全体的に、通説にこだわらずに、ケインズを自由に論じているので、経済思想に関心をもつ読者が、部分的にでも読んで楽しんでいただければ幸いである。経済学史や経済思想史という学問は、経済学部で教科から消えつつあるので、どのような形にせよ、その学問の面白さを伝えるのは私たちの責務だと思っている。

2022年6月18日（京都大学創立記念日に）

根井雅弘

## 目次

はしがき

3

はじめに――何度も生死を繰り返すケインズ  
ますます高まるケインズへの関心  
偏ったケインズ像への不満

12

## 第1章

誤解の元になった『自由放任の終焉』

23

「個人主義」の二つの源泉

アダム・スミスは自由放任主義者にあらず

スミスによる政府の三つの役割

ケンブリッジ学派と自由放任主義の一線

実業家という存在

政府がなすべきこととなすべからざること

## 第2章

# 産業政策はケインズ政策の重要な柱

ケインズ革命

産業への関心

日本の紡績業との比較

銀行に適切な行動を求める

廃れた経済騎士道

シュンペーターが見抜いたイノベーションの本質

「投資の社会化」とは何か

イギリス病対策にも指針を与える

政治家にも受け継がれる思想

ケインズらしさ

経済悪の治療法

ケインズが求めた20世紀の資本主義

ケインズとハイエクの個人主義

自由放任主義が通用しない20世紀

### 第3章

## 『一般理論』をどう読むか

難解とされる『一般理論』

長期的問題としての「不況」

『一般理論』と45度線

国民所得決定理論と流動性選好説

ケインズにとっての「不確実性」

流動性選好説

雇用と利子率の関係

利子は「貯蓄」という行為に支払われる？

読者を驚かせるケインズ

物価と貨幣供給量の関係

愛弟子も理解していない!?

貨幣の三つの性質

失業の原因は「貨幣愛」にあり

完全雇用は難しい

## 第4章

# 「ケインズ以後」からみたケインズ

「ケインズ以後」の経済学者

ケインズのマクロ静学とハロッドのマクロ動学

貯蓄は美德？ 悪徳？

ヒックスのIS/LM分析

流動性選好説vs.貸付資金説

ケインズ革命はどうなったのか

新古典派vs.ケインズ

合成の誤謬への留意

辺境の地ポーランドから現れたカレツキ

「左派ケインジアン」としてのJ・ロビンソン

カレツキ革命？

カルドアの出版



## 終章

# ケインズから現代へ 一つの読書案内

『一般理論』に至るブラック・ボックス

マクロとミクロの折衷を拒否

二人の天才、ケインズとスラッファ

21世紀のケインズ復活劇を読む

経済学は控えめに？

モラル・サイエンス

あとがき

図  
版  
制  
作

ア  
ト  
リ  
エ  
・  
プ  
ラ  
ン

はじめに、何度も生死を繰り返すケインズ

いま、私の手元には、ケインズ経済学に関する2冊の本がある。

(1) D・デイラード『J・M・ケインズの経済学貨幣経済の理論』岡本好弘訳（東洋経済新報社、1973年）原著は1948年の刊行、日本語版は旧訳に少し修正を加えた新版

(2) W・カール・ビブン『誰がケインズを殺したか物語で読む現代経済学』斎藤精一郎訳（日経ビジネス人文庫、2002年）原著は1989年の刊行、日本語版は単行本が1990年に刊行されているが、これはその文庫版

(1) は、わが国におけるケインズ経済学の普及に重要な役割を演じた定評ある解説書で、

私も学生時代に読んだことがある。著者のディラードは、制度経済学にも造詣の深かったケインジアンだが、この本は、ケインズの『一般理論』に即して丁寧な解説をしていることと多くの読者を得た。いま読んでも、ケインズ入門として十分に通用するだろう。

原著が出版された1948年は、ポール・A・サムエルソン（1915～2009年）の有名な教科書『経済学 入門的分析』の第一版が出版された年でもあるが、マクロ経済学の分野ではケインジアンしかほぼいなかったと言ってよいので、当然ながら、ケインズに好意的な立場で書かれている。ディラードも、次のように、そのようなスタンスを決して隠そうとしていない。

「ケインズの考えが広く受けいれられているにもかかわらず、彼は過去においても現在においても論争の中心人物となっている。本書が論争上の問題にふれるかぎりにおいては、おそらくケインズに『同情的』であると呼ばれる態度をとっている。私の判断によれば、いかなる経済学者の研究に対してでも、そのりっぱな解説というものは同情的な態度をとってこそ、わかりよいまた明快なものとなりうるのである。しかしながら、ケインズが批判した人々の思想の説明者としての彼の欠陥や、詳細な事項に対しおちついて論ずること

をしない彼の性急さといったことを私は知らないのではない。ケインズは自分自身の方法で自分の思想に到達したという意味で独創的思想家であった。彼が与えた思想はたとえだれかほかの人がもつと古い昔に同じ思想あるいは類似の思想を説明していたとしても、彼自身のものではあった。このためにまた別な理由にももつとづいて、ケインズの思想が有効需要の原理に関する異端的先駆者に関係をもっているとか、あるいはもつと現代的な、アングロサクソンおよびスウェーデンの貨幣理論家に関係をもっているとかのように、彼の思想の経歴をたどってみることはしていない。他の人々から受けた影響よりはるかに重要なのは、ケインズが彼の新しい理論に到達するうえに歴史的事情が与えた影響である。このことを説明するのが最後の章の主目的のひとつである。ケインズが『古典派』経済学と呼んだもの、とくにピグー教授の研究に関する彼の批判に関しては、ケインズが自己の立場を明快にしかつ人々を説得する力をもたせるために好んで自分の主張を、ことさらに、強力に述べる傾向にあったものとみるべきであろう。」（岡本訳、~~XXXXX~~ページ）

（2）は、（1）から40年以上も後に書かれた本なので、その間に生じた経済思想の潮流の変化（戦後まもなく主流派になったサムエルソンの新古典派総合、インフレの昂進とと

もに台頭したミルトン・フリードマンのマネタリズム、レーガン政権の誕生とともに脚光を浴びたサプライサイド経済学、ロバート・ルーカスの合理的期待形成仮説など）を幅広く紹介しているが、著者が「反ケインズ」の立場かといえそうではない。結論として提示されているのは、ケインズの考えの多くは修正され一部は否定されたが、現代でもいまだに生きているというものだ。ビブンは、その本のむすびにおいて、次のように述べている。

「興味深いことに、偉大な経済学者というものはすべてこうしたものなのかもしれない。ケインズの膨大な著作を注意深く研究してきた学者の多くは、種々の問題についてケインズは実に柔軟な姿勢をとったと指摘している。つまりケインズは、間違ったと気づいたときや、政治的制約によってその政策の実行が不可能だとわかったときは、進んで意見を修正したという。もし今日、ケインズが生きていたら、彼の考えの多くを確実に修正したところだろう。もちろん、与えられた個別の問題に彼がいかなる意見を述べるかはまったく定かでない。しかし、彼の旺盛な好奇心と無限のエネルギーをもってすれば、ケインズは確実に論争の中心にあり、その魅力によってある者を味方につけるだろうし、これまた彼の

人格の一部であった傲慢さで他の者を当惑させたことだろう。

一人の子供が遊覧船の上からケインズの帽子を水面に入れたとき、ケインズは怒らず、我慢した。私はまた、そうできたケインズのことを考えるのが好きである。」（斎藤訳、ページ）

### ますます高まるケインズへの関心

ビブンの本が書かれてからさらに30年以上の時間が経過した現在、ケインズに対する関心は衰えるどころか、ますます高まっているといっても過言ではない。その証拠に、いつの時代でも洋書の新刊案内にはタイトルに「ケインズ」を含む本がいくらかもあったし、2021年には、ケインズの『一般理論』の新しい翻訳と超訳が刊行されているのである。<sup>\*1</sup> ケインズ研究者であっても、とてもすべてを読むのは困難なほど膨大な文献数である。

私が経済学を学び始めた頃は、まだサムエルソンの教科書は使われてはいたものの、反ケインズを標榜する経済学の台頭も著しく、ケインズは押され気味であった。いまから回顧すると、フリードマンのマネタリズムは古くからある貨幣数量説の現代版で、真に「新

しい」経済学ではなかった。サプライサイド経済学も、すべてではないが、レーガン政権の大減税を正当化するためのプロパガンダに近く、ケインズ政策を「赤字漬けの民主主義」をもたらした元凶だというジェームズ・M・ブキャナンなどの批判も、ケインズ自身の思想のごく一部をデフォルメした「言いがかり」のようなものだった。唯一、シカゴ大学のロバート・ルーカス（1937年～）による「マクロ経済学のミクロ的基礎」に関する論文は、その方法論の当否は措くとしても、学部生のとき一般均衡理論を学ぶゼミに所属していた私には興味深く思えた。実際、ミクロの経済主体の最適化行動からマクロ理論を構成しようとしたルーカスの方法論は、ケインジアン「古い」マクロ経済学を主流派の座から追い落としてしまったし、その後のマクロ経済学の展開に大きな影響を与えた（「ニュー・ケインジアン」でさえ、ルーカスの方法論を踏襲している）。

しかし、学界に身を置く研究者でも、よほどケインズ自身の著作を読み込んだ者でない限り、古いケインジアン「古い」の理論や政策がどの程度ケインズ自身のそれを受け継いだものなのか、よく理解できていない場合が少なくない。一般の読者ならなおさらのことである。もともと、ケインジアンとケインズを区別するという視点は、もう50年以上も前、アクセル・レイヨンフーヴッドの『ケインジアン「古い」の経済学とケインズの経済学』（1968年）



の出版以来、専門家には周知のものかもしれないが、レイオンフーヴッドのケインズ解釈も、ワルラスの一般均衡理論から「競売人」を除けば「古典派」の世界から「ケインズ」の世界に移行するという、アルフレッド・マーシャル以来のケンブリッジ学派を研究してきた専門家には到底承服し難いものなので、ここでは深入りしない。

### 偏ったケインズ像への不満

私が京都大学大学院（経済学研究科）において指導教授をお願いした二人の師（菱山泉と伊東光晴）は、学風はずいぶんと違うものの、どちらもケインズ経済学に関しては立派な研究業績を残している経済学者であった。菱山先生は、早い時期から、ケインズの『確率論』（1921年）と『一般理論』（1936年）の関連に関心をもって、1960年代にケインズの「不確実性の論理」\*2<sup>2</sup>についての一連の論文を書いている。伊東先生は、言わずと知れたベストセラー『ケインズ 新しい経済学<sup>3</sup>の誕生』（岩波新書、1962年）の著者であり、ケインズ経済学と寡占理論などを武器に論壇で華々しく活躍してきた。二人の師から学んだことは、本書の随所に活かされていると思うが、ここであらかじめことわっておきたいのは、本書がどのような視点からケインズの面白さを伝えようとしている

かという点である。

私は、日本でこれまでケインズの思想史研究が盛んであったにもかかわらず、巷に流通している新聞や雑誌のレベルでいまだに偏ったケインズ像に基づいて彼の名前が使われていることに不満を抱いている一人である。つまり、相変わらず、不況になるたびに財政赤字を伴う公共投資という意味での「ケインズ政策」の提唱者としてのみ語られているのである。確かに、それはケインズ政策の一面ではある。しかし、そのみを切り取ってケインズを理解してしまうと、彼が生涯を通じて取り組んだ活動のほとんどを見落としてしまいかねない。そこで、回り道のようなではあるが、第1章では、多くの誤解を招いたパンフレット『自由放任の終焉』（1926年）の内容を正確に読み解くことから始めたい。次に、第2章では『一般理論』に入る前に、ケインズがイギリス産業の将来に深い関心を寄せていたことを産業政策の観点から概観したい。その基礎の上に、第3章で『一般理論』原典の読み方についての試論を提示したあとで、第4章で「ケインズ以後」の経済理論の展開から逆に『一般理論』の特徴を再考していきたい。そして終章において、現代におけるケインズの可能性と限界について考えてみたい。

もちろん、本書のような新書版では、専門家にしか通じない話の大部分は割愛せざるを

得ないが、それでもケインズ理解にとつて必須と思われる内容は私なりに咀嚼しながら採り入れていくつもりである。

\*1 山形浩生編・訳・解説『超訳 ケインズ「一般理論」』（東洋経済新報社、2021年）

大野一訳『雇用、金利、通貨の一般理論』（日経BPクラシックス、2021年）

\*2 いちいち論文名はあげないが、関心があれば、拙著『経済学者の勉強術いかに読み、いかに書くか』（人文書院、2019年）をお読みいただきたい。

今こそ読みたいケインズ  
根井雅弘・著

発行：集英社インターナショナル（発売：集英社）  
定価：968円（10%税込）  
発売日：2022年12月7日  
ISBN：978-4-7976-8114-7

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)